

自己評価報告書

平成23年5月6日現在

機関番号：32634

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730378

研究課題名（和文）明治期感化院における感化教育の整備と展開

研究課題名（英文）Reformatory school of education in the Meiji era

研究代表者

庄司 拓也（SHOUJI TAKUYA）

専修大学・人文科学研究所・特別研究員

研究者番号：10468621

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：社会福祉関係、日本史、教育学、社会学、教育心理学

1. 研究計画の概要

明治期の東京感化院における感化教育、感化実践を分析する。これまでの感化院の研究は、家庭学校を中心に蓄積されており、それ以前に設立された初期感化院の検討は十分になされていない。そこで、東京感化院を中心に初期感化院の教育・実践とその成果に検討を加え、その後の児童保護（現在の児童福祉）のあり方によどのように影響を与えたのかを考察する。

2. 研究の進捗状況

現在、入院生に焦点をあてて、東京感化院の教育・実践のあり方の研究を進めている。具体的には、以下のような考察を行った。

（1）入所費などから、東京感化院の入院生は経済的に恵まれた階層を中心にしてきた。入院生の階層性は、感化教育のあり方に影響を与えていたと考えられる。

（2）感化院にとって入院生の脱院・脱走は大きな問題であった。ただし、入院生の階層性は、脱院や脱走といった問題行動にも影響を与えていた。

上流階層中心の不良少年を収容していた東京感化院では、脱院者の多くは家族のもとに逃げ込み、家族の手で施設に連れ戻された。一方、底辺中心の不良少年を収容していた東京市養育院感化部では、脱院者の多くは逃亡先としての家族はおらず、そのまま行方不明になってしまった。つまり、東京感化院において、家族・家庭は入院生の感化教育からの脱落を防ぐセーフティネットとして機能していたと考えられる。

（3）明治期から大正期にかけての感化院の職員の不良少年観の変遷を検討することに

より、時代的な特色があることを確認できた。精神医学の発達や活動写真の広まりなどにより、子どもの素行不良化の要因は新たに追加されていったのである。子どもの素行不良化の原因分析の変化は、感化院における感化教育の変化の要因にもなったと考えられる。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

（理由）

明治期の東京感化院における感化教育、感化実践の特徴を分析するにあたって、大正期や昭和期のあり方を検討し、比較をしなくてはならないこと、かつまた明治期の他の施設（家庭学校や東京市養育院感化部など）の感化教育、実践のあり方を検討し、比較しなくてはならないため、やや遅れている。

4. 今後の研究の推進方策

明治期の他の感化院の教育や実践のあり方も比較・検討しながら、東京感化院の実態や特徴を分析していく。他の施設と比較・検討することで、東京感化院の特徴がより明確なものになると考えられる。

また、東京感化院や他の施設を比較・検討することで、施設をタイプ別に分けることを試み、明治期の感化教育の整備と展開につなげたい。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① 庄司拓也、「感化院における脱院・脱走に

関する考察－東京感化院と東京市養育院
感化部を事例として－』、『地域社会福祉
史研究』第4号、16頁－25頁、2011年、
査読有

- ② 庄司拓也、「明治・大正期における不良
少年観の変遷－東京感化院・成田山感化
院を中心として－』、『千葉・関東地域社
会福祉史研究』第35号、9頁－25頁 2010
年、査読有
- ③ 庄司拓也、「明治期における東京の不良少
年と感化院について－感化院と収容児の
階層性－』、『地域社会福祉史研究』第3
号、3頁－15頁 2009年、査読有

〔学会発表〕（計1件）

庄司拓也「明治・大正期の感化院における不
良少年観の変遷」、社会事業史学会第11回大
会、2009年5月9日、東洋大学